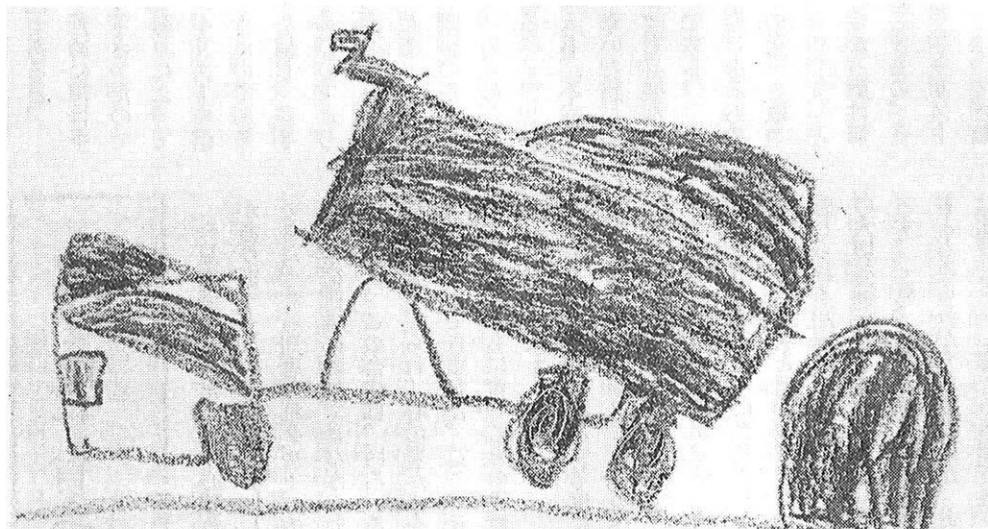


光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替 東京3-128022
印刷 (株)ドモン企画



は
た
ら
く
じ
ダ
ン
プ
カ
ー

ばらぐみ しおの きよし

滅びからの解放

(ローマ・10・20・21)

理事長 福島 勲

百年ほど前、ドイツからムンチ

厚意的に注している。

ンガーという宣教師が来日して五
年間伝道した。病気でやむなく帰
国したが、日本社会について一冊
の本を書いている。

その中に日本人は嘘(LUGE)

悪の現実である。

を罪とっていないと指摘する。

聖書はこの様な罪状に対して、

具体的な例はあげていないが、
私にも思い当たる節がある。

すべての被造物が虚無に服したと
いう。虚無とは何もないというこ

戦後京都で伝道していたドイツ
人ヘッセルさんが、近所を一軒一
軒廻って集会の案内をした。

いともの、ことに神の栄えをあらわ
す役に立たないさまを言っている

ハイ、寄せてもらいます、と返
事した人を数えてみると、自分の

つづいて、このようになったの
は、神によってそうさせられた、

ところの椅子がたりない。あわて
て借り集めて、時を待ったが、ほ
んど姿を見せなかった。

とある。奇妙な表現だ。そうだと
したら、われわれには責任も罪も
ないと人はうそぶくであろう。

彼は日本人は嘘つきだと大変な
剣幕で怒っていた。

恐らくここではどうにもならな
い悪を強調してこういつている。

このあたりの日本人気質とい
うか、慣習というか、これを知るま
では時間がかかるだろう。

あるいは、これを書いたパウロの
頭の中に、伝道の書七・13 あた
りがあったのかもしれない。

ムンチンガーは時代が移れば、
この嘘の習性も変化するだろうと

神の曲げられたものを人がまっ
すぐにできようか。人にはできな

いが、神だけが可能であると。
この間借りを正すために神はキリストを世に送って下さったのである。十字架の死と甦りによって一切の罪を滅し、キリストを信じる者を義としたもうたのである。クリスマスはそれを信じ、義を与えられた者のみの祭りであり喜びである。
これはギリシャ人にもユダヤ人にも、人種の差別も階級のちがいにもよるのではなく、万民に与えられた救いなのである。
貧しい人も富んだ人も、不幸と想っている人にも、幸いと感じている人にも、だれにでも必要なキリストであり、救いである。
「人ごとに一つの癖はあるものを、我には許せ敷島の道」と歌った人がいた（慈山）
和歌の道を癖というが、癖は無意識のうちにひき起こすもの。
わたしは五十年近く、キリストの十字架のことばかり語ってきた何か語るとこれに及んでしまふ。癖になっているとすると、自分では有り難いことと思うが、こんな話してお許しいただきたい。

今夏を過ぎて、ただ一つ心残りがあります。この十数年間参加してきた、ある知恵遅れグループの親子合宿訓練に参加できなかったことです。この合宿は、いろいろな学びを与えられ、心の豊かさを学ぶことができた。ここで示唆された、ともに育つことの奥義の一端を、お伝えします。
毎年、この合宿に参加する度に本来的な親子や家族はこうあるべきだろうと思われ、それについて考え続けてきましたが、結論は意外に単純なところに至りました。つまり、弱者と言われ、重荷に感じられる知恵遅れ児にこそ、その大切な鍵が潜んでいるとの視点です。一見、弱者と見られる厄介者ともみられがちな障害児が、実は他者を生かす育てる真理契機をもつことは、秘義といえましょう。このことは、誤解を恐れずにいえば、弱者の秘義と考えられます。おそらく、家族の一員である重荷

を背負う子どもを中心にして、お互いに助け合う関係が必要不可欠になるのです。このとき、弱い存在とみられた障害児が、相補関係の生起者として、他者を生かす育てると考えられます。
このような育ちの原則は、心身に特別の障害を有しない養育児をめぐって見ることが出来ます。家庭事情により、親と共に家庭で暮らし育つことができなくなった施設の子においては、より一層顕著であるとも言えます。
たとえば父母間の葛藤の場合では、大人の援助を必要とする弱い存在としての子どもを、もう一度自分たちの中心に据え直すことで、協力関係が復活します。事実、三才男児の両親が復縁して頑張っています。やゝ心もなくなった母親が六才女児と暮らし直す熱心が貧しいけれど暖かい生活をつくっています。
子どもの存在に心を集める態度

へと包容するとき、親たちの著しい劇的な展開が見られます。もちろん子どもも、この変容を経験することで驚く程の成長を遂げます。共に育ち合うのです。
このことはまた、集団や地域社会の変化・成長にも当てはまります。生涯を難民救済や世界平和運動に献じたビートル神父の「他人の重み」の信条が想起されます。
「人間は他人の△重荷△によってつぶれるのではなく、その他人が自分にかかわっている△重み△によって、かえって自分が生かされていくのである」
世の中には、障害者や老人など弱者や厄介者と呼ばれがちな人々がいます。しかし、彼らこそ、共に育ち合う社会を築き上げるための中心的存在としてなくてはならない人々なのです。人間の存在の根拠を生起し続ける、大切な生産者であります。

ともに育つ

施設長 今関 公雄

十月ともなると、私たちの保育園でも「運動会」の準備で忙しくなる。とは言っても、子どもたちにも、運動会向けの練習をさせたりという事を特別にするわけではなく、忙しさはもっぱら大人たちの事前の準備の為である。住宅街の中にある小さな保育園のことで、親たちも参加して皆で飛び回れるようなスペースはない。私たちの運動会は、子どもたちといつも散歩に行く近くの公園を利用して開催してきた。毎年十月の第三土曜日に行われる。親が参加して皆で楽しむ協同の行事は、この他に二つあって年間で三つの全体的な行事で、どれも土曜日に催されている。最近では親たちも随分と休暇をとり易くなってきているが、親たちの都合は日曜日の方が楽だ。すると、子どもの方は、下手をする二週連続で休みなく登園なんて事が起る。そんなことでこの秋、土曜日が利用されてきた。

そろそろ卒園していった子どもたちとの協同行事創りも期待できるところにきているのと、以前はどは土曜日にこだわらなくても代わりの休みもとれるようになってきている等から、もっと多くの人が参加できる日（日曜日など）に設定すること、それに参加者のできるだけたくさんの方の企画・運営からの参加の態勢づくりが当面の課題になってきた。

さて、「運動会」のことだが、当初から親が「見学者」で子どもたちが見る人という学校運動会に染み込んでしまっているイメージが親たちにはもちろん職員にも強く、それ以外の方法はなかなか思い浮かばなかった。
私たちの園のように小さな規模（赤ちゃんと就学までの小グループ、総数でも42名）だと、それでは運動会自体が殆ど成り立たない。そこで、当初から親子で身体

を動かして楽しむということをやテーマにして、色々アイデアを凝らしてきた。それでも三、四年はこれまでの運動会のイメージをもとにして、親子で楽しめるものにして、親子で楽しめるものにして、走り（早く！）跳んだり（勇気を出して、うまく！）踊ったり（皆からはずれないで）という要素的な動作を基礎に親子で挑戦ということが中心になる。もちろんそれぞれに楽しさもあり身体を動かす快感があり、親にとっては子どもの育ちの様子が生々しく、手応えもあり、何とも暖かな気分がひたれる一日ともなる。

また、せっかく野外で木々や風や虫や取りたちに囲まれていながら運動とはいえ死文の体の内部の感覚を楽しむだけというのはもったいない。もっと外の世界とのやりとりを楽しんだり、その中で体の存在そのものとの対話を楽しむような運動はないのだろうか？



そんな動きや表現が皆で楽しめれば「障害児」が浮いてしまった（だから特別に配慮されたり）することもないだろう。もちろん親や大人の方が巧みだという保障もないから親子が一緒になって楽しむ以外方法がないことになる。

そんな運動会を創りたいと、ここ四、五年、色々試みてきた。題して「親子運動会ーオリエンテering風ー」。

私たち愛用の公園を隅々まで生かして、秋という季節や様々な生き物に参加してもらって親子でそして皆で一日を過ごそうというものである。草原に座りこんで子どもたちの似顔絵を画くコーナーなんていうのもある。子どもも結構真面目顔でモデルになりきっていて面白い。今年はどうなるだろう。

現場から

育つ

その2

竹花 信恵

兄弟が、家に帰った。担当保母として、子どもたちと一番近い位置にいた私は、遠い遠い存在となっていく。自分が、忘れられてしまう存在となった時、その寂しい時が、子どもたちにとって、最も幸せな時となっているだろうと思う。ここで作られた思い出が、ひとつ季節が変わった今でも鮮明に焼きついている。

私の手を取り合い、隣りに寝る順番で静った子どもたち。そのまま家で暮らすようになるかも知れない家庭帰省中に訪問した時、私の二m以内には近づかなかった。それを心から喜べるほどの私ではなかったが、その様子が、「何とかやれるかな」と思われる大きな判断材料となった。

ここに居る間、担当者は子どもたちと最も近い位置にいる。それは、寝食を共にしていく生活の中で、自然にVであると共に、かなりの喜怒哀楽、試行錯誤の日常

の上に創られていく関係である。親から引き離し、泣き叫ぶ、あるいは、感情を表すことさえできないでいる子どもの、その耐えがたい悲しみを引き受けるところから、ここの第一目が始められる。

表情が豊かになった、言葉が増えたといっは喜び、学校で落ち着かないと指摘されて落ち込み、まさに一喜一憂の日々を重ねていく子どもが問題を持っているのではなく、生きいきと生きられる生活づくりに対応できなかったり、成長をじっくり待つことができなかったり、自分たちの欠けVを見せつけられ、AできないVことの多さに立ち竦むことの多い日々である。それでも、子どもたちの成長のエネルギーに驚かされ、それに立ち会える喜びの方がどれほど多いことだろう。いつの間にかかけがえのない関係へ移行していることに気づかされる。

その一方で、子どもたちが何よ

り望んでいる、親と共に暮らせる日をめざして、私たちは私たちがの力を尽くす。それは、時間と経済と、そして何より、この仕事の持つ基本的な意味Vそのものに突きあたっていく重さを持つ。

家へ帰すことをめざしながら、その後更に困難な生活が待っていることの方がはるかに多く、ハッピーエンドの区切りのつけられることは稀にしかない。どんなに大変なことを、子どもなりに分かっ上で、それでも「お母さんのそばにいる！」とはっきり意思表示した二年生の柊くん。学校にお別れの挨拶に行った日、永くんは、片隅で「帰りたい」と泣いた。帰りたい所は、私たちのA家Vでも、勿論私のところでもない。このA家Vの方が、子どもが育つ上の全ての点で条件がいい。させたい経験、教えたいこと、山ほどある。

しかし、それを超えた絆がある。子どもたちには親がいるのである。私たちは、どんなに近づこうとしても親になれない。A代わりVという限定された存在なのである。ここは、私たちが快い思いをす

るために建てられたA家Vではない。まして、私たちが仕事をするため、私たちの自己実現のために子どもたちがいるわけではない。必要とする人々が、必要とする時に利用する生活の場なのである。しかし、ここは、ただ通り過ぎる場、すれ違う人間同志の集合体でもない。確実に手こたえのある密度の濃い時間が流れている。

幼い子どもたちの、人生や人格や感性などの重大な基礎の形成にかかわってしまった私たちもまた絆をもつ。ここを出ていった子どもたちのA実家Vとして見守っていきたい。

新たに四人の担当保母となり、一ヶ月がすぎた。また一歩目にもどり、かけがえのない関係をつくらうとしている。

お詫び

十四号三頁に掲載の松本市斎氏の「良寛と子どもたち」に脱字が三行もありました。松本市氏は固辞されましたが、全文を五頁に再掲載してお詫び致します。

良寛と子どもたち

松本 市壽 (良寛研究家)

雪がとけて若菜が萌えはじめる春になると、良寛は黒衣の托鉢姿で国上山から里に下りてくる。遠くから良寛の姿を見つけると子どもたちは歓声をあげて集まり、良寛を取り巻き甘えるのだ。

「良寛サ、鬼ごっこしよ！」
「良寛サ、毬つきしよ！」
サ
こうなると良寛はたまらない。鉢の子を道ばたに置いたまま子どもたちと手毬つきやカクレンボに遊びほうける。

十字街頭 乞食しおわり
八幡宮辺 まさに徘徊す

児童相見て ともに相語るらく
去年の癡僧 いままた来たと
これは、良寛得意の場面であり原風景である。しかし、何のため良寛は子どもたちと無心に遊んだのか。これは当時の里人たちがらも再三問われたし、現代人はまづ必ずといってよいほどの設問を發することから始める。
そこで良寛は「つきてみよひふ

みよいむなやこ、のをとをと納めてまた始まるを」と歌を詠む。何はともあれ毬をついてみたらよい、一二三四に始まって十となりそこからもういっぺん一二三だ。なぜって別に意味もない、意味なんぞ論じなくとも、ほれ四五六七、判るでしょ、この手ざわりとリズム感、ごんべが種まきや鳥がほじくる、はいはい、とね。

良寛が最も嫌ったものは、退いて理を振るまわすことであつた。現代でも教育論は多いが、教育の骨格は失われている。徳育のありかたの是非を論じて、その肝心の子供の心の場から足が離れてしまいう弊害を言わんとしている。そこでそれを声高に唱揚すると、それは是非の論となり際限がない。

しかし、待つて下さいよ、それでは子どもに教える徳目は、どこから紡ぎ出されるのです？ そのとき良寛は黙して何も語らなかつたろう。徳目とか、ありようなん

てお子様ランチのメニューじゃあるまいし、あなたの生きてあるそのありようが、写し絵のようにそのまま子どもに乗り移るのじゃ、とても言いたげであつたろうか。

遊び疲れると、良寛は路傍に横臥する。子どもたちの葬式ごっこの始まりとなる。子どもたちは良寛をいたぶって楽しむことに余念がない。子どものどんなイタズラにも良寛は無限に寛容であつた。

そんなことは、大人に向かってやるべきことではないとか、礼儀に反するなどというお説教は一切無し。子どもたちは、あたかも母の胎内にあるような安堵感をもって良寛をもてあそんだものである。

こんなにワガママな子どもたちを放置しておいては非行少年になるのでは、というのは大人の心配。要路に立つ人、平凡な主婦と生きかたの違いこそあれ、立派な成人となつて良寛を懐かしんでおり、またその子どもも良寛のうしろ姿を追って遊んでいるのである。

良寛のもつ無限の寛容とも見える態度は、自己への厳しさから来ているもので、省みて他者批判に

転ずる現代の教育論とは異軸のものであるが、その厳しさは外部からは見えにくい。むしろ不可解であり「愚か」とも見えるものでもある。良寛の愚は、ほかならぬ「是非の理のからみ」を解放するものとしてあつたのである。

いじめや非行は、競争社会の排他性がモデルになつていて、そこでの自己確認にすぎない。福祉が施しとしてあり、よいことをしているのだという優越の思いこみのある限り、無意識のうちに恩着せがましさが覗く。偽善の臭氣に子どもほど敏感なものはいない。

「世上の榮枯は雲の変態」「欲なければ一切足り、求むるあれば万事窮す」という詩の断片から良寛が自己に課した思想を知ることが出来るが、それとても説教ではなく漢詩の叙述としてのみある。

良寛は教育者でもなく社会福祉家でもなかったが、なしたことはそれよりもはるかに大きい。寺の住職でもなし、ただの乞食坊主として越後の大地を托鉢して歩きまわった。ただそれだけの社会的存在であつただけなのに――。

良寛と三人の道楽息子

① 山本馬之助の話

松本 市壽（良寛研究家）

良寛は宝暦八年（一七五八）の生まれで、時の將軍は徳川家重、江戸時代後期の初めです。越後では佐渡金山の黄金時代が過ぎ、佐渡金銀の陸上港だった出雲崎を取り仕切る町方名主の長男として良寛は生まれたのです。

父親の以南は生来の短気者で、家業に身を入れないばかりか配下の町年寄敦賀屋と争って譲らず、俳諧に凝ったり、一方では派手な浪費癖が嵩じて町方からの取立ても厳しく、町民の不満もひとかたならぬものがあつたのです。

良寛は十八歳のとき名主見習役になるのですが、現在でも残されている町はずれの獄門跡という処刑場で罪人を殺す現場に立会ったり、代官所と町民の間をうまく取り仕切る才能に欠けるころがあり、これではとても名主なんぞにはなれそうもない、と決心して隣町尼瀬の禪寺光照寺に入って出家してしまうのです。

出家したあとの出雲崎橋屋山本家は、四歳年下の弟由之が継いだのですが、由之も父親に劣らぬ放埒なところがあつた、町民からの強い反感にあつて、のちに家財取上げ所払いという代官所の判決を受けて出雲崎を追われ、与板に隠栖することになります。勿論これは

独り由之だけの責任に帰すべき原因によるものではなく、名門橋屋の追い落としを狙う敦賀屋と隣町尼瀬の名主京屋野口氏との暗躍という背景はあるものの、由之の側にも、これを防禦するだけの周到な配慮に大きく欠けるところがあつたことは否めません。

由之の長男馬之助は、こういう難しい時期に橋屋山本家の跡継ぎとなることを運命づけられます。前途多難な橋屋の将来を思うにつけ、暗澹たる不安に駆られたか、いつしか出雲崎の娼門通いも繁くなり放蕩に身をやつすことになったものと思われまふ。

これを心配した両親は、何とかして放蕩をやめさせたいと願つたものの、代々からの放蕩癖の血筋はそう簡単に改まるものでもありません。思案に余つた末、国上山の五合庵にいた良寛を呼びにやつて、馬之助を説諭してくれるよう懇願したのでした。

良寛は出家してから、備中玉島の円通寺で禪僧の修行を終え、しばらく諸国放浪行脚の末に越後に舞い戻り、外護者の支援によって真言宗国上寺の住職の隠居所である五合庵に仮住し、托鉢僧として越後蒲原の地を歩きまわつていた時期で、ようやくその高德を慕われはじめていた頃でした。

呼ばれて郷家橋屋にやつて来た良寛は、頼まれていたことも忘れただかのように、三日過ぎてもいっこうに馬之助に向かつて説教を始めるでもなし、馬之助はしゃあしやあと朝帰りの毎日で、何の進展も見られない。この様子に、しびれを切らした母親の安子は、「良寛さま、はやく馬之助に何とか説諭してやつて下さいませよ」と催促するが、良寛は「うん」と

言うだけで、何の変化も行動も表わそうともしない。

とうとう良寛は国上山へ帰ると言い出した。何のために良寛を呼んだのか、良寛も大したことはないただの虚飯坊主に過ぎないんだなあ、と半ば諦め顔の両親は、しぶしぶ良寛の身仕度を手伝つた。

橋屋の玄関の上り框に腰をおろして、良寛は草鞋を引きよせ、履こうとする段になつてから馬之助を呼んだ。馬之助は、どうやら伯父の良寛は説教しにやつて来たらしいが、何事もなくて帰るらしいと安堵して玄関先に現われた。

「馬之助、すまないが、この草鞋の紐を結んでくれまいか」

馬之助は良寛の前にしゃがんで草鞋の紐を結びにかつた。と、その手許に熱い涙が二、三滴こぼれ落ち、ハツとして馬之助は良寛の顔を見上げると、その両眼には白く光る二筋の涙が湛えられていたのを見てしまったのです。

それより馬之助の態度は急に改まり、由之なきあとの橋屋山本家を何とか支え通すだけの意地を示したとも伝えられています。

現場から

暮らしの風景

石毛 照子

「今度、ネバーランドに連れてってあげるからね」と笑顔を向ける珠弥ちゃん。二才になる一日前に佐藤家に来て、この夏で三才になりました。お話が大好きで、何冊も絵本を抱えて「読んで」と来ます。読んでもらいながらぐっすり眠る珠弥ちゃん。夢で、きつとネバーランドで皆と遊んでいるでしょう。その素敵なネバーランドにきつと案内してくれるでしょう。珠弥ちゃんたちならば・・・豊かな心と優しさの溢れる子どもたちに囲まれている私たちは幸せです。

また子どもの布団の間に入ってお話をしながら眠ってしまい、夜中に目を覚まし、五人の子どもと布団の乱れを直す。翠くんと鷹くんとの間の布団にもぐって寝ます。翠くんと鷹くん。小学校一年一組、と言っても一学年一クラスの小規模校なのですが、今更ながら同じ年の子どもを二人一緒に担当する難しさを感じる毎日です。

喧嘩しながら暮らしてもう一年が過ぎました。人を氣遣うやさしさや成長も驚くほどの子どもたち。人との関係を言葉よりも手や足での暴力的に表現していた一年前の翠くん。お喋りが過ぎて食事が遅れるほどのこの頃ですが、学校ではまだ喧嘩になってしまつてことがあるようです。返事ができたり絵を描いたり、学校でも頑張つて少しづつ変わってきました。

抱かれた経験や殆ど持てないで一年生になってしまった翠くん。もう一度赤ちゃんになって、人の温もりの中でやり直す最後のチャンス。家では抱つてのしかたをやっています。人への信頼を軸にした暖かい優しさをもつといっぱい持たせたい。そしたら翠くんは大丈夫、心配ない大人になれそう。

アトピー性皮膚炎に悩まされる鷹くん。四月から食事療法のお医者さんに変わりました。子どもにとって食事の制限がいかに大変な

事なのか、気がついたのは夏休みも終わろうとする頃でした。学校ではヤル気のない落ち着かない子、家では精彩のない生活になっていました。職員会議で仲間から指摘され、元の高橋医院に戻って治療を再開して頂きました。今は学校でも、家でも痒さなんか吹っ飛ばぐらい、生きいき輝いています。芙蓉先生ありがとうございます。

生まれてから六年間、異なる環境で育つた二人です。私にはどっちも一番可愛い双子のようです。

鷹くんも翠くんも未来の世界に夢を描きます。サッカー選手、バイクのライダー。どんな大人になるのか、それぞれこれからの生き方は異なるだろう。どんなに違つても、支え合い、助け合つて伸びていってほしい。その道筋の強く堅固なものにするために、何が必要か、何をしなければならぬかを考えながら創つていこう。あなたたちとの関係を。お互いの関係を。

子どもたちが、怖かつたり困つたり、疲れた時に逃げて帰れる家を、確かな生活を創る家を、安心して休む心も投げ出せる家を、人

人との関係を求めて、仲間たちと考え、語り合つてやってきました。これからも、子どもの全てを受け止め、成長を助けられる働きができるようにと願っています。

最初の年、二ヶ月で退所していた公子ちゃんに、あれもすればよかった、こうもしてやりたかったと数え切れない後悔の山を築いたことを、ことある毎に思ふ。あつという間に自転車に乗れるようになった権也くん、運動会でも一等賞。何でも自分でやりましたが、出づらかった逸郎くんがマラソンを毎朝始めています。頑張れーくじけないでね。

いつも、これでいいのだろうかと思ひます。何をしたらこれでもいいということはないでしょう。赤トンボを追いかけて、虫の声を耳を澄まして一日が終わります。子どもたちに、仲間たちに暖かな眠りと素敵な夢を。



日誌抄

八月十六日
十月十五日

八月十九日 町内の橋本興業、社

員の子どもたちが使った物で大変失礼だがと、沢山の玩具・絵本などトラック満載で、多額のご寄付も、言葉少なに。第三回感謝の集いに来店も。感謝。

二二日 K四兄妹、家庭引取りを前提に家庭帰省、家庭訪問を繰り返し、北海道の母方の郷里を再三訪ね、祖母や母の兄弟と話し合い、実父とのトラブルを調整し、子どもたちの利益を獲得するための困難を極めた取り組みの中で確実に成長した四人。一年半の軌跡を残して、更に困難な再婚家庭へ。母と暮らしたくて・。苦難を訓練にして更なる成長と神の加護を祈る。

二五日 県内坂戸バプテスト教会牧師ご夫妻来訪。激励を。

三〇日 K四兄弟退所第四号。

さよなら夏休み大バーティを園庭で。今夏の成果を確認し二期を迎え撃つ決意を。バーベキューを、篝火を囲んで。

九月一日 N姉妹(一才・三才)

入所。生活と育児に疲れた父に手を引かれて。原田家竹花担当

九二二日 小学校担任教師との懇談会。夏休みの報告と二期の目標確認。公平と正義、倦むことを知らない先生方の子どもへの熱意に刺激を受ける。

一四日 第一二二回職員会議。事業計画の見直し再調整を始める。

子どもたちの成長の大きさに驚き、その成長でも追いつけない負っている課題の膨大さに心痛む。個別養護計画の練り直しに事業全体を連動して再設定し、補正予算案の作成へ。職員態勢の再点検と各々の姿勢制御を。

十月半ば迄の職員会議で。二二日 聖ヨゼフホームより鈴木施設長他2名が、施設建て替え計画のための見学に来訪。熱心な話し合いも。

二二二二三日 二期の学校生活へ適応しきれない一年生四名を奥秩父の民宿へ。三峰山に元気に登り自信回復をやったネ。

三十日 子どもたちや職員が時々アイスクリームなどを求め、その度にサービスの大沢商店から中古の自転車を買っていただく。感謝

十月四日 小学校運動会。走り、跳び、踊る子どもたちのエネルギーの爆発。ガンバル子どもたち、早朝から弁当作りに応援にガンバル職員たち。美しい汗。

十日 幼稚園運動会。朝、五時半応援席の確保に丹羽倫己が走る九時。来た来た、お父さんが、お母さんが！ガンバルゾ！一等賞だ！九名の子どもに六名も親たちが駆けつけて、声をからして応援しました。楽しかった！

・俳句誌「浮野」創刊十周年記念チャリティ表紙絵展の収益金が落合氏たちより贈られる。感謝。

十一日 地区運動会。秋元光代が百米とリレー、坂巻直之が千五百米に出場して敢闘。ツカレタ

十四日 いつも熱烈な支援の梅沢三保さんよりお米の贈り物。

十五日 町内大塚房子氏より遊具のご寄贈。心から感謝。

・今年、地盤沈下など敷地の整備のご援助をいただいた国際婦人福祉協会、来月に見学と激励会を予定。下見に来訪。(くら)

反射光

麗かな秋の日ざし
が幼い子どもたちの食卓まで届き、いつの間にかコックリコックリ舟を漕がせます☆松本氏の文の再掲は、お詫びは勿論なのですが、完全なものを皆さんに読んで頂きたいという私たちの思いからいたしました☆第三回感謝の集いを開く季節になりました。

初めは意気込みばかりで他には何も持ち合わせませんでした。今は何と多くの人々に囲まれていることでしょうか。第二回の集まりからこれまで、多くの人々、団体の支援によって、今年も公的な定数以外の職員を二名確保し、敷地、倉庫などの付帯工事をする事ができました☆本紙も十五号、三千五百部を発行するに至り、反響も多くなり、無償でご執筆下さる先生方も次々に加えられています☆そんな全てが、延べ三七名の子どものための養育のための大事な支えです☆子どもたちのプライバシーは守ります。しかし、感謝の集いは身内の人々の集まりです。子どもたち共々心を込めて、おもてなし致します。どうぞ。(哲)